

# 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 43 2016. 12

特別寄稿	
館脇 操先生小伝 (第2回) 五十嵐 恒夫	----- 1
談話会報告	
中村晴彦氏のお話について 大山 圭也	----- 5
活動報告	
企画展「ランの王国」を終えて 船迫 吉江	----- 6
ポプラチェンバロ 今昔物語 松田 祥子	----- 7
恐竜研究、カナダ留学、そして……アオヤマ君！ 田中 康平	----- 8
リニューアルした博物館の魅力 野村 さおり	----- 9
その他報告	
博物館見学者の感想文紹介 (その1)	----- 10

## 特別寄稿

### 館脇 操先生小伝 (第2回)

北海道大学名誉教授 五十嵐 恒夫 (1955年農学部林学科卒業)

#### 4. 先生のフィールドワークと研究

##### 植物分布境界線

##### —Schmidt's Line と Miyabe's Line—

先生は、北半球の広大な地域で精力的なフィールドワークを行った。1923~24 (大正 12~13) 年、宮部教室の助教授工藤祐舜博士とともに、樺太 (現サハリン) 中部の幌内川低地帯の調査に入った。ここはロシアの地質学者シュミットが、低地帯を挟んで自生する植物種が異なると述べていたところである。詳細な調査の結果、低地帯の南西部は日本に自生する樹種が多く自生し、ササも分布するが、北東部にはササの分布はなく、山岳林はグイマツ林であることを確認し、幌内川低地帯を植物分布境界線と認め、工藤博士によりシュミット線 (Schmidt's Line) と名付けられた (図1)

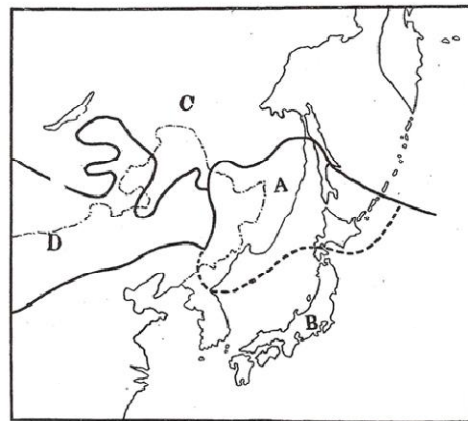


図1 東アジア北東部の植物地理学的ゾーンの区分 (Tatewaki, M., Forest ecology of the islands of the North Pacific Ocean. 北海道大学農学部紀要 50巻, 4号, 1958 年より)

- シュミット線: サハリン中部のAとCを分ける線
- 宮部線: 千島列島をAとCに分ける線
- A: 汎針広混交林帯 (タテワキア)
- B: 東亜温帯
- C: シベリア亜寒帯針葉樹林
- D: 中央アジアステップ帯

館脇先生はさらに千島列島、アリューシャン列島の調査に入った。北のカムチャッカ半島から千島列島中部のウルップ島までは植物の固有種がほとんどなく、高木種もほとんど見られないが、南隣のエトロフ島までは千島列島の南からドロノキ、ケヤマハンノキ、シラカンバ、ミズナラ、アズキナシ、エゾイタヤ、ベニイタヤなどが見られ、また針葉樹林としてはエゾマツ林、アカエゾマツ林、トドマツ林が見られる。これらの調査結果から、館脇先生は 1933 (昭和 8) 年に千島列島中部のウルップ島とエトロフ島の間には植物分布境界線があることを認め、恩師宮部金吾先生を記念し、Miyabe's Line (宮部線) と命名した (図 1)。

### 北アジアの調査

先生は 1937 (昭和 12) 年から 1944 (昭和 19) 年にかけて沿海州、中国東北部 (当時満州国)、黒竜江上流、大興安嶺、ホロンバイル、興安西州のステップなど、いわゆる蒙疆をめぐった。蒙古地方の印象が大変強かったのか、自らを蒙州と号したことから愛称が蒙(もう)さんと呼ばれるようになった。

### 湿原、牧野林の調査

戦前、札幌近郊の幌向原野や対雁原野の泥炭地は手つかずの自然のままであった。館脇先生は鉄道で足しげく通い、「群落生態から見た石狩幌向泥炭地の植物生態」(1928) や「対雁原野植物目録」(1942) などをもとめられた。幌向の名を持つ植物を 7 種発見し、命名されている。ホロムイソウ・ホロムイスゲ、ホロムイソツツジ、ホロムイリンドウ、ホロムイコウガイ、ホロムイイチゴ、ホロムイクグの 7 種である。先生の湿原に対する関心は続き、戦後は天塩のサロベツ原野へ向かった。友人の松川五郎氏 (1925 年北大農学部卒) が山形県の開拓義勇軍を連れて満州から引き揚げてきて入植したところの調査であった。

牧野林については、「北日本牧野の植物学的研究」(1943-1944) がある。かつて根釧地方の陸軍軍馬補充部が使っていた混牧林の調査がもとになったもので、ササ群落の調査から得られたデータを展開したものである。この場所は戦後京都大学演習

林となり、足寄地方の軍馬補充部の林野は戦後九州大学演習林となっているが、先生はここでも植物目録を作成している。

### 森林群落調査法ベルト・トランセクト法の確立

館脇先生は 1933 (昭和 8) 年から 1935 (昭和 10) 年にかけて、北大天塩演習林で森林の群落的解析を日本で初めて手がけていた。林学科の優秀な学生 (森本伝男、岩間亀三郎、内田映先輩など) の卒業論文として、ともに群落の解析とその表現方法に努力された。しかし、樹木の平面図の記録と文章による表現には限界があり、とても難解な論文であった。

1955 (昭和 30) 年前後には、館脇教室でベルト・トランセクト法による森林解析方法が確立され、容易に森林群落の状況が理解できるようになった。1 例として、女満別のヤチハンノキミズバショウ基群集の調査結果を示すと、高木層は樹高 30~33m、胸高直径 32~46m のヤチハンノキに占められ、林床はミズバショウが優占する。林木配置は図 2 に示す通りである。

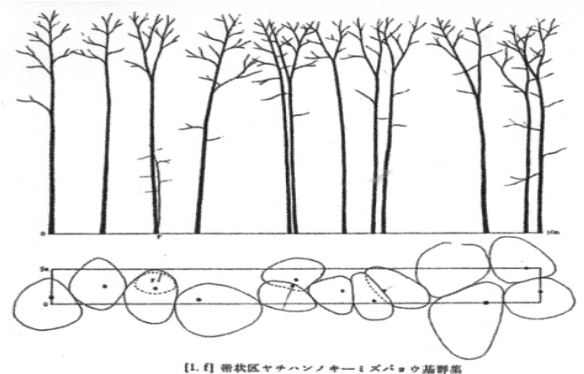


図 2 館脇 操・遠山幹夫・五十嵐恒夫 (1967, 北海道大学農学部紀要, 6(2), 284-324) より

林床植物の調査は、調査ベルトの基線にそって連続した 5m×5m の小方形区を設け、小方形区ごとに生存する植物それぞれの被度 (林床を覆っている割合) を測定し、林床植物一覧表を作成する。平均被度 5~4 の植物を優占種とし、上部 (高木層) の樹種と組み合わせて基群集名を与える。図の林の群落名はヤチハンノキミズバショウ基群集となる。

## 日本の森林の調査

戦後は海外調査などできる状況ではなかった。館脇先生の目は日本の森林帯に向けられた。北海道、東北、中国、四国、さらに九州は屋久島までの森林の解析が行われ、「日本森林植生図譜 I～X (1956-1966)」がまとめられた。この研究には多くの研究者(植物教室のスタッフに限らず、他学科、他学部、他大学、さらに林業試験場や営林局の人たち)も参加している。

「日本森林植生図譜」は10篇からなっているが、このうち4篇は北海道の森林が取り扱われている。これらのうち、2篇(IV, VI)の概要を以下に紹介する。

### IV 北限地帯のブナ林の植生

館脇 操編著 (1958)、164pp. 函館営林局

本篇は3章からなっている。

#### 第1章 ブナ分布の北限帯(館脇 操)

黒松内低地帯を中心とするブナの分布とし、島牧地方、寿都半島(特に大和の沢)、歌才の天然記念物、歌棄など地方ごとにブナの分布状況を述べ、ベルト・トランセクト法による群落の解析をおこなっている。群落はブナーネマガリダケ基群集、ブナーオオカメノキーネマガリダケ基群集が見られる。

#### 第2章 北限帯附近山岳地方のブナ林(三角 亨・河野昭一)

狩場山(1520m)と長万部岳(972m)には、伐採されていないブナ林があり、この2山を調査地とした。

認められた群落は：

ダケカンバーチシマザサ基群集

ブナーチシマザサ基群集

ブナーオオカメノキーオクヤマザサ基群集

ブナ・ダケカンバーチシマザサ基群集

ブナーミネカエデーオクヤマザサ基群集

ブナーオクヤマザサ基群集

ブナーネマガリザサ基群集

これらの群落は、狩場山では海拔450～740m、長万部岳では580～860mのブナ林に見られた。

#### 第3章 西島牧泊川流域のブナ林(館脇 操・五十嵐恒夫・渡辺定元)

この地域は大平山(1190.6m)を主峰とし、西側を南から北に向かって流れる泊川があり、地形はやや急峻である。樹木の分布は、海拔900mまで純度の高いブナ林で覆われ、貧弱なダケカンバを挟みハイマツ林に移行する。大平山は石灰岩からなる山で、頂上から連なる岩峰には崩壊部が多く、これらの地ではブナの上部限界は500mまで下降する。ブナ林に混交する樹種は、部分的に河畔近くでエゾイタヤ林、岩石崩壊地でヒメヤシャブシ林がある。ウダイカンバ、サワシバ、ミズナラ、オヒョウ、ホウノキ、アズキナシ、ナナカマド、ハリギリなどは単木的に混交する。日本海側の高山で見られる広葉樹林とダケカンバ林との間に針葉樹林帯を欠く現象は、本山でも同様であった。

ブナ林でみられた群落は：

ブナーオオカメノキー基群集

ブナーオオカメノキーオクヤマザサ基群集

ブナーオオカメノキーハイイヌガヤ基群集

ブナーシラネワラビ基群集

ブナーチシマザサ基群集

ブナーホツツジ基群集

ブナームラサキヤシオツツジ基群集

ブナーヒメヤシャブシ基群集

ブナーオオブキ基群集

上部の草原や岩峰には、オオヒラウスユキソウ、エゾムラサキモメンヅル、チシマリンドウなど32種類が注目すべき植物種としてリストアップされ、調査区域全体の植物種として379種が記載されている。

### VI オホーツク沿岸の落葉広葉樹林植生

館脇 操編著 (1961)、96pp. 北見営林局

網走湖畔、能取半島、浜小清水、止別、常呂の各地で、1954～1959年にかけて行われた調査結果が取りまとめられた論文である。

網走湖畔では、女満別、呼人西南部、呼人半島西岸、呼人半島東岸で調査され、対象となった森林はヤチハンノキ林、ヤチダモ林、ヤチハンノキ・ヤチダモ林、ナガバヤナギ林、ドロノキ林、ハルニレ林、ミズナラ林、ヤチダモ林、ヤチハンノキ林である。

ヤチハンノキ林で解析された群落は：

- ヤチハンノキーミズバショウ基群集
- ヤチハンノキーエゾイラクサ基群集
- ヤチハンノキーオオバナノエンレイソウ基群集

ヤチハンノキースゲ基群集

ヤチダモ林の群落としては：

- ヤチダモーミズバショウ基群集
- ヤチダモーオニシモツ基群集
- ヤチダモーエゾイラクサ基群集
- ヤチダモーエゾイラクサ基群集
- ヤチダモークサソテツ基群集
- ヤチダモーオオバナノエンレイソウ基群集

ヤチハンノキ・ヤチダモ林では：

- ヤチハンノキ・ヤチダモーミズバショウ基群集

ナガバヤナギ林では

- ナガバヤナギーヨシ基群集
- ナガバヤナギーエゾオオハコベ基群集
- ナガバヤナギーハマニンニク基群集

ドロノキ林では

- ドロノキーマイヅルソウ基群集

ハルニレ林では：

- ハルニレークサソテツ基群集
- ハルニレーウスイロスゲ基群集

ミズナラ林では：

- ミズナラークマイザサ基群集
- ミズナラーマイヅルソウ基群集

能取半島では、以下の基群集が見られた。

- エゾイタヤ・ミズナラークマイザサ基群集
- ミズナラーエゾイタヤークマイザサ基群集

浜小清水では、エゾノコリンゴ叢の解析を行った。網走から斜里に向かう砂丘には、随所に高さ1～4mのエゾノコリンゴ叢がある。面積は240～570㎡、根元の直径4～17cmである。

止別では、砂丘に見られるカシワの自然林を解析した。樹高は10～15m、胸高直径34～70cm、林床にはクマイザサが優占する。部分的にはエゾヤマハギ、ススキ、アキカラマツが被度の高い所もある。群落としては、カシワークマイザサ基群集である。

常呂では、北見市常呂町の西方から佐呂間湖付近に至る長さ約5kmの砂丘にはオホーツク沿岸における砂丘上の代表的なカシワ林がある。魚付林として網走国立公園第2種特別地域となっている。渚から砂丘に直角に幅5mのベルトを2本設定し、植生状況を解析した（館脇 操・五十嵐）。カシワは、渚から40mはなれた第1砂丘の背後から発達し、第2砂丘（海拔10m）に続いていく。この部分のカシワは顕著な風衝形をなし、樹高1～3m、渚から奥に入るにしたがい樹高をまし、渚から50mの第2砂丘の頂上にかけては8～10mに達する。樹高が安定するのは、渚から80m奥に入った地点からで、樹高は10～12mとなる。林内にはエゾイタヤを少し混生し、少量のハリギリとナナカマドを生ずる。林床にはクマイザサが優占するが、マイヅルソウが多いところもある。群落としてはカシワークマイザサ基群集である。

#### 汎針広混交林帯 (Pan mixed forest zone)

館脇先生は、1954（昭和29）年文部省の短期在外研究者としてスウェーデンに出張した。そこでヨーロッパブナ林とヨーロッパトウヒ林の間に介在する森林が、北海道黒松内低地帯以北、サハリンのシュミット線以南、千島列島中部の宮部線以南、中国北東部～ロシア極東地区の森林と、きわめて類似することに気づいた。

- 1) 亜寒帯性針葉樹林または亜寒帯針葉樹林に属する広葉樹林が全域に存在しない。
- 2) 亜寒帯針葉樹林と温帯性広葉樹林がモザイク式配列をしている。
- 3) 混交林における亜寒帯性針葉樹種と温帯性広葉樹種がモザイク的混交をしている。
- 4) 針広混交林に特殊な広葉樹林（ハルニレーエゾイタヤ林、シナノキーエゾイタヤ林、ミズナラ、サワシバなど）が存在する。
- 5) 代表的樹種の所属する属（*Quercus*, *Ulmus*, *Carpinus*, *Corylus*, *Fraxinus* など）が共通する。

以上5点の類似点をあげ、先生は、これらアジアの地域に見られる森林は北欧のヨーロッパブナ林とヨーロッパトウヒ林の間に介在する森林と相

同（森林を構成する種、属、および形態が共通すること）のものと考え、汎針広混交林と名付けた（北方林業，1955-1957）。

### タテワキアの提唱

長年にわたる森林研究の集大成として、1958年先生は「北太平洋諸島の森林生態学研究」を公表された。また、上に述べた北海道黒松内以北、樺太シュミット線以南、千島列島エトロフ島以南、中国北東部～ロシア極東地区に囲まれた地域に対し、植物区系として「タテワキア」と呼ぶことを提唱した（図1）。

（続く）



演習林作業員たちとともに。  
北大天塩地方演習林の湿原系アカエゾマツ林にて  
1960年10月24日（先生61歳）

## 談話会報告

### 中村晴彦氏のお話について

平成遠友夜学校ボランティア 大山 圭也

今年最後の談話会が12月9日午後4時から、博物館3階学習室で開催されました。今回は、中村晴彦氏（昭和37年理学部卒）による「坂本直行さんのあれこれ」という演題での講演でした。中村氏は北大山の会（北大山岳部OB会）会員で、現在、博物館で開催されている坂本直行生誕110年記念企画展示「直行さんのスケッチブック展」を担当されています。

講演に先立ち、直行さんの一周忌を機に制作、放映されたNHKのテレビ番組「いごっそう開墾記」を観ましたが、30年以上も前の映像ということで感慨深いものがありました。その後、直行さんの生誕から時代を追って、写真やスケッチなどの資料を紹介しつつ、エピソードを交えながら、その生涯について講演していただきました。

道東の釧路市で生を受け、札幌二中（現札幌西高）から北大へ進学し、山岳部創立メンバーとして道内の山々を歩いた学生時代（1906～1928）から、岳友である野崎の経営する牧場での生活をした時代（1929～1935）、結婚して広尾・下野塚の開墾に

取り組み、農民運動にも力を注いだ開拓者としての時代（1936～1960）、開拓地を離れ、画業に専念し、帯広千秋庵（現六花亭）のデザインなどを手掛けた豊似アトリエ時代（1960～1965）、そして札幌に移住してからの手稲アトリエ時代（1965～1982）まで、直行さんの生涯についての興味深いお話に、あっという間に時間が過ぎました。

講演終了後、懇親会に移り、中村氏を含めて18名の参加者は、交流を深めつつ楽しい時を過ごしました。



中村晴彦氏講演の様子

## 活動報告

## 企画展「ランの王国」を終えて

植物ボランティア 船迫 吉江

1年半に及ぶ耐震工事が終わって、リニューアルオープンした博物館内には、正面玄関の突きあたりに企画展示室が新設されました。プレ展示に続き、リニューアル後最初の企画展「ランの王国」が8月5日～9月25日まで開催されました。

アカデミックでありながら、普段でも近隣の保育園や幼稚園の子供たちの声や観光客の姿が多くみられる大学構内にある博物館なのですが、今回の企画展は、タイトルの「ランの王国」が人を誘ったのか、無料のためか、子供達が夏休みのためか、老若男女が香りに誘われて、昆虫、化石、恐竜にも負けないほどたくさんの方々が来館しました。企画展開催中の入館者数は50,758名とのことでした。

入口に近づくと、今回の展示のテーマの一つでもある「香りの展示」の箱が3種類おいてあります。1つ目はランの一般的な香りを人工的に表現した箱、2つ目はフウランの香りに誘われる蛾（コスズメ）の昼と夜の香りの違いを人工的に表現した箱、3つ目はダーウインの進化論に因んだ、距（花冠や顎の一部が管状に突出したもので蜜を貯める管）が長いランと口吻の長い蛾（キサントバンスズメ）の出会いを表現された香りの箱。来館者の多くがそれぞれのふたを開けたり、閉じたりパタパタとその音は賑やかでした。またレブンアツモリソウはマルハナバチの実物を展示、オフィリスの仲間のラン唇弁にしがみつく蜂の姿の実態とともにリアルな画像で表現されておりました。オーストラリアには特異なランが多く自生しているようですが、特に地中で花が咲くランの生態に蟻が関わっているらしいとは驚きです！ランの戦略には脱帽です。

この展示で最も興味深く拝見したのは、東京都の世界遺産「小笠原諸島」のラン科植物の保全活動報告のパネル展示と公開セミナーです。私は20数年前に行きましたが、沢山のランに会うことなどできませんでした。

白花のシマホザキラン（父島、北硫黄島）、黄色のアサヒエビネ（父島）、最近新種として発表された白花のアサヒエビネ、着生ランのムニンボウラン、新しく発表された白花のトサカメオトラン（向島）、ムニンシュスラン（父島、母島、）キソチドリの仲間と近縁とされるシマツレサギソウ（父島、母島、兄島、向島）等々です。特に黄色のアサヒエビネの美しさと、トサカメオトランに見惚れました。南の島のランはどれも葉や花も肉厚で大きく存在感のある花が多いと思いつつ、チョットだけ北の野生ランとも似たところがあり、何となくわかるようなものもありました。

線のきれいな花の記録図譜を興味深く拝見しました。出口には大きなパネルで、小笠原諸島の「めぐもん」と礼文島の「あつもん」が記念写真の撮影場所にされていて多くの方が嬉しそうに展示室を後にしました。これは若い人の知恵かもしれません。

私も植物画により「ランの王国」に関するプレ展示で23種、企画展で23種、道内の野生ランの画を展示する機会を頂き、協賛できましたことに感謝申し上げます。

実学の精神が生かされ、アカデミックでありながら、敷居の低い博物館に感動した道外からの来館者もおりました。大学の博物館が暗い牢獄から脱出したようです。



ラン展で微笑む船迫吉江さん

## 活動報告

## ポプラチェンバロ 今昔物語

ポプラチェンバロボランティア 松田 祥子

10月29日(土)に、ポプラチェンバロ10周年記念行事として、トーク&コンサートのイベントが行われました。

博物館のリニューアルオープン記念でもあるこの企画、ポプラチェンバロが製作されてからちょうど10年の節目ということもあり、設置当初に博物館においてチェンバロ関連を統括されていた小俣友輝さんのオーガナイズにより、当時の関係者の方々をお招きして、それぞれのポプラチェンバロにまつわるお話しをしていただきました。お話の後にはチェンバロのコンサート、そして関係者の皆さんによる座談会と、盛りだくさんの内容で、満席の会場のお客様にもポプラチェンバロのことを様々な面から知っていただけたのでは、と思います。

トークの部では、藤田正一元館長が台風によるポプラ並木の倒木にまつわる事情などをお話になり、製作者の横田誠三さんは倒木ポプラが楽器になるまでの道のりやチェンバロという楽器についてのお話をされました。また、北大オルガン研究会OBの藤井健吉さんからは、チェンバロの大学における活用法の検討やチェンバロボランティアの枠組み作りに取り組んだことなど、当時のポプラチェンバロを取り巻く状況について色々な角度からのお話を聞くことができました。今現在、ポプラチェンバロが博物館で親しまれる存在になるまでには、色々なご苦勞があったのだな、ということ垣間見ることができる、良い機会でした。

コンサートでは、ポプラチェンバロのお披露目演奏もされた水永牧子さんのとても素敵で、チェンバロの音色を楽しむことができました。スヴェーリンクやバッハなど、チェンバロのための美しいバロックの曲の他にも、10年前のお披露目当日にも演奏されたという「かっこう」「グリーングリーン」などのなんと楽しい耳馴染みのある曲達からなる「牧場のメドレー」や「時計台の鐘」なども演奏いただき、会場のお客様も楽しそうに

身体を揺らして聴き入っていました。最後には「都ぞ弥生」のリクエストも飛び出し、大サービスでアンコールを締めくくっていただきました。

座談会でも、それぞれのお立場からのご意見やお話のやりとりが繰り広げられ、会場からも質問が出てそれに答えたりと、始終和やかな雰囲気でした。

製作者の横田さんも、演奏された水永さんも、楽器がとてもよく鳴っており柔らかさが増した、普段からボランティアの方々が弾いてくださっていることがわかりますね、と(鍵盤奏者の)チェンバロボランティアの方々への労いのお言葉もありました。イベントの後には、横田さんが数日ばかりで楽器のメンテナンスをしていただきました。普段はボランティアの方々に日々、楽器の状態に気を配っていますが、チェンバロは温度や湿度の変化などにもとても敏感で繊細な楽器なので、良い状態に保つのはなかなか難しいです。こうして定期的に“お父さん”に来てもらえると、チェンバロも嬉しいし、ボランティアも安心できます。リニューアルオープン後にもボランティアの定期的なミニコンサートも再開されており、今後も生きた状態に楽器を保って活用していけると良いと思います。

今回、色々なお話を伺って、ポプラチェンバロが博物館に迎え入れられて、ここにいられること、そして、博物館のような場所にあつてなお、楽器として活用されて、来館者の皆さんにも愛されていることを思うと、改めて幸せなチェンバロだなあ、と思いました。



左から、石井、新妻、横田、水永、藤田、藤井、小俣、松田の各氏

## 活動報告

## 恐竜研究，カナダ留学，そして……アオヤマ君！

カナダ、カルガリー大学地球科学科 博士課程在学中 田中 康平

関西出身の作家、森見登美彦さんの著書に、『ペンギン・ハイウェイ』というSF小説があります。主人公のアオヤマ君は科学の子。まだ小学4年生なのに、いくつもの研究プロジェクトを抱えていて、大変多忙です。ある日、彼の住む新興住宅街にペンギンが現れたことをきっかけに、アオヤマ君の世界の果てを巡る研究が始まります。

私は科学に携わる者として、アオヤマ君に大変感心しています。アオヤマ君は日々の生活にたくさんの疑問を持ち、観察・記録し、仮説を検証していきます。研究はわがままな妹の生活記録や、水路の源を突き止める探検、草原に浮かぶ謎の球体の調査と様々です。小学生らしい、とても可愛らしい疑問から、哲学的な人類の疑問にまで至ります。彼の分析は冷静かつ論理的で、しっかりとした説明を与えていきます。全くたいしたものです。将来きっと優れた科学者になると思います。

翻って私は、カナダに留学中の大学院生です。アオヤマ君のように子供のころから自然科学に興味を持ち、北大理学部を卒業し、現在はカルガリー大学で恐竜の研究を行っています。私の住むアルバータ州では恐竜化石がたくさん見つかри、カナダ恐竜研究の中心地とも言えます。世界中から恐竜学者や学生が集まります。恐竜に興味のある者にとっては、まさに夢のような場所なのです。

そんなアルバータで、私はかれこれ8年ほど研究を続けています。「好きな研究をして暮らしているのだから、毎日楽しいだろうねえ」と思われる方がいらっしゃるかもしれません。全くその通りなのです。研究を続けていると、たくさんの疑問が生まれます。しかし私が扱うのは、6,600万年も前に絶滅してしまった奇妙キテレツな動物群。一筋縄ではいきません。化石標本から、現在の動物標本から、文献上のデータから、様々なソースを利用して手がかりとなる証拠を集めていき、疑問の解決策を考えます。誰も思いつかなかった手法を生み出して問題を解決できれば、これほど嬉

しいことはありません。研究は簡単ではありませんが、小説の主人公になったかのように、冒険の世界に身を置くことができるのです。

そして恐竜化石がザクザク見つかるアルバータに留学してみて、思うことがあります。アルバータは恐竜研究において、確かに便利な場所なのですが、場所を選ばなくても良い研究はできるということです。留学先には、優秀な学生もいれば、そうでない学生もいます。たとえアルバータにしようとも、研究の良し悪しは本人のやる気しだいに変化します。一方、恐竜化石に乏しい日本でも、素晴らしいアイデアを持って素晴らしい成果を挙げている研究者はたくさんいます。場所は関係ないのです。留学してから、私はこのことに気が付きました。どんな環境でもしっかりとした研究ができるよう、心がけるようになりました。

そんなことを考えていると、やはりアオヤマ君は感心すべき科学の子だと気付きます。自分の住むまだ小さな世界の中で、壮大な疑問を見つけていきます。場所を選ばないアオヤマ君の観察眼は素晴らしく、科学者のお手本のようなのです。

さて、私の博士課程もいよいよ大詰め。留學生活もあと少しで終わります。留学を通して学んだ多くのことを、今後還元していければと思います。そしてアオヤマ君のような、やる気に溢れた学生さんにたくさん出会いたいと願っています。



チビッコ科学者に恐竜を教える筆者



## 活動報告

## リニューアルした総合博物館の魅力

ポプラチェンバロボランティア 野村 さおり

「博物館のソフトクリーム絶品だよ。ビールも飲めるようになって最高！」

家庭の事情でしばらく札幌からもボランティア活動からも遠ざかっていた私にリニューアル後の様子を伝えてくれたのは、北大構内をジョギングするのが趣味の友人でした。

新しくなった博物館は、これまで厳格で近寄りがたかった祖父が、柔和なお爺ちゃんになった感を私に抱かせます。

まず正面玄関にできた受付。今日は今井さん、臼田さん、滝川さん、前田さん、三宅さんのどなたにお会いできるかな・・・と想像しながら博物館に向かう道は、私のひそかな楽しみです。彼女たちの温かい笑顔と一言が、ボランティアへの意欲を高めてくれるのです。

入館すると、右前方から心地よいざわめきと、芳しいコーヒーの香り。これがリニューアル後の大きな目玉であるカフェ「ぼらす」です。カフェ好きの私は「ぼらす」の誘惑に勝てたためしがありません。利用するときは、ボランティア仲間との楽しいお茶のひと時だったり、いつもよりコーヒーの苦味を強く感じる活動反省の切ない時だったり、一人ぼんやり過ごしたり、とさまざまです。フィンランドに留学経験のある友人は「雰囲気、景色、静けさ、何から何までがフィンランドの大学にあったカフェとそっくりだ」と感激していました。そこにいる人の心を自由に好きなままにしておいてくれる、そんな「ぼらす」です。

そして、肝心のボランティア活動です。リニューアルに伴い、ポプラチェンバロには専用の展示室が設けられました。温度湿度等の外気の変化に敏感なチェンバロという楽器に最大限の配慮をされて作られた部屋です。この展示室の設置に関してご尽力いただいたのは、新宿の近くに住んでいながら高校生の頃から「コガネムシをやっていた」という自称シティボーイの大原先生、研究者のみならずバリトン歌手としてもきつと成功して人気を博していたであろう甘い声とマスクの持ち主の山本先生、そしてチェンバロが大好きで、

わが子のように慈しみ、成長を見守っている熱いハートの持ち主、代表の新妻美紀さんです。私たちチェンバロボランティアは、日々ポプラチェンバロ及び展示室の状態をチェックし、楽器に興味を示した来館者の方々に時には演奏を交えた説明をするのを主な活動としています。この他に、この夏は開館時間が21時まで延長となる金曜の夜に2回コンサートを企画し、たくさんの方々にポプラチェンバロの音色を楽しんでいただきました。また、リニューアル後の活動として、毎週水曜日の14時からチェンバロのミニコンサートを知の交流ホールで行っています。

今後はリニューアルした博物館の展示室を生かして、そして他のボランティア、また先生方の研究と連携した形でのイベントができればと考えています。



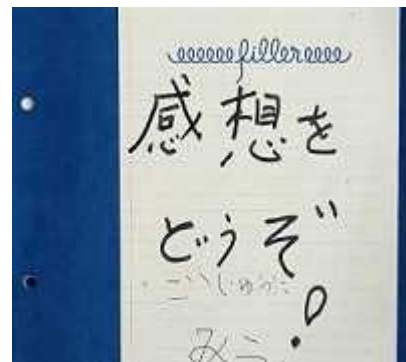
展示室に収まったポプラチェンバロ

その他報告

博物館見学者の感想文紹介（その1）

北大総合博物館の3階廊下に、図書ボランティアが整理している貴重な古新聞を展示してあります。これは、植物標本を挟んであったものです。コーナーに「感想をどうぞ！」とノートを用意したところ、さっそく多くの書き込みがありました。その一部を紹介します。

- ・新聞のコーナーに感激しました。私も昔の新聞を集めたり、「全国各地の新聞題号収集」をつづけてますが、これほどのものは初見です。今後も”文化の継承”という有意義な仕事を切に願い、御健勝をお祈りします。
- ・無料なのに、すごく充実した内容で面白かったです。特に「ランの王国」と恐竜のところがよかったです。見終えれなかったところもあったので、また来たいと思います。ありがとうございました。
- ・ホンモノのマンモスに会いたい。あと、りんしょうけんさぎしについての写真もあって、りんしょうけんさぎしになりたいと思った。
- ・獣医学部のところがおもしろかったです！！あと、地しんとこか面白かったです！（キラキラ）
- ・昭和時代の新聞もおもしろかったです。またきます。
- ・きょうりゅうと医学部が楽しかったです。大きくなったら、かようぞ!!（10才）
- ・展示物全体に魅力を感じ、とても楽しむことができました。ありがとうございました。またくることができましたら来たいです。
- ・TVで見て行きたくなって、来ました。ニッポノザウルスなどの恐竜の化石を間近で見て、とても迫力がありました。とても楽しかったです。
- ・どーもですー。きゅりーぱみぱみでーす。すごくたのしいです。
- ・むかしの新聞は、字が小さくて、おどろきました。
- ・ちょうど学校祭で戦争のことを調べて展示するので勉強になってよかったです。
- ・ウシのほねが大きくてびっくりしました。
- ・京都より参りました。大学博物館ということで期待していなかったのですが、非常に充実していて驚きました。北大の長所や最先端をわかりやすく知れて、とても楽しかったです
- ・またゆっくり見て回りたい。「北海道を知る」上で、貴重な知見を得ることができました。
- ・北大卒業生です。19年ぶりに構内に入りました。この博物館、楽しい。
- ・みんなで来て楽しかった・・たのしいよ。
- ・これで無料ってすごいですね。頑張ってください。



北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 43

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会（編集委員：星野、今井、大山、児玉、沼田、久末、山岸）
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2016年12月1日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>